絵画学習のワークショップ化に関する事例研究
―絵が描けない人のためのインクルーシブアート教育の方法論から―

A Case Study of Learning Painting through Workshops (Participatory and Collaborative Learning)
−from the methodology of inclusive art education for beginning students of painting

茂木　一司

MOGI Kazuji

要　旨

本稿は、絵画の初学者のための学習方法とその背景にあるコンセプトを明らかにすることを目的とする。通常、アカデミックな絵画学習では見えるものをそのまま再現する写実的な技法を習得させるために、形態を捉え、色彩（色調）を合わせる造形的な学習を段階的進めていくのだが、絵が苦手もしくは描きたくても思うように描けない人には技能優先主義は不適切である。筆者は、絵画基礎実習Ⅰ（入門）の授業をワークショップ化し、美術（アート）が技能ではなく考えること（思考）の身体知であることを体験的に伝え、絵画初学者の概念崩しをさまざまな方法で試みた。本稿はその実践の分析であり、絵画（芸術）の学習を通したものの見方の全体性の重要性を学ぶ報告である。

1　はじめに

筆者は2021年４月より文学部人文学科教授として跡見学園女子大学に着任し、今まで担当していなかった美術の実技・実習の専門科目を数科目担当することになった。筆者は２つの国立大学（法人）教育学部で美術教員養成に約39年間携わってきた。教育学部とは教員養成の目的大学で、いわゆる美術科教育という（厳密な縛りはすでにないが）学科目を担当する教員として認証を受け、主に教職教養科目（図工科指導法、美術科指導法等）を中心に授業をしてきた。本稿で扱う「絵画基礎実習」は美術科の教職科目の中で教科専門科目になっているので、本来であれば実技（絵画）の教員が担当する科目であるが、少ない専任で教職課程を運営している私学ではカリキュラム上多種の科目を担当するのはままあり、新鮮な気持ちでプログラム作り及び実践をした。

跡見学園女子大学文学部人文学科は本大学で唯一教職課程を持つ学科である。ここに着任してそのカリキュラムを見て一番驚いたのは科目区分に基礎実習という選択科目が設置されていることだった。その理由はもちろん前述のように、教員免許（美術科、書道科）取得に必要な科目という理由で

ある。しかしながら学生は教職を取らなくても美術の実技を大学の基礎科目として受講できる仕組みを持っている。跡見学園女子大学の履修課程の詳細を述べることは控えるが、（１・２年生が新座キャンパスで学ぶ）前期課程では全学共通科目42単位以上（外国語、情報処理、導入科目、教養科目、共通専門科目、社会人形成科目、体育実技）の他、文学部共通科目（講義、実習）と人文学科専門科目の「総論」（８単位以上）、「研究入門」（４単位）、「資格科目」（教職科目）と「基礎実習」として「書道基礎実習Ａ・Ｂ・Ｃ」「絵画基礎実習Ⅰ・Ⅱ」、「彫刻基礎実習Ⅰ・Ⅱ」「デザイン基礎実習Ⅰ・Ⅱ」「工芸基礎実習Ⅰ・Ⅱ」が準備されていて専任と非常勤講師で担当している（表１）。

区分	授業科目	単位	必要単位	履修年次	開講期	担当教員
基礎実習	書道基礎実習ＡⅠ（入門）	1	選択	1・2	春学期 秋学期	専任
	書道基礎実習ＡⅡ（応用）	1		1・2	春学期 秋学期	非常勤
	書道基礎実習Ｂ（楷書）	1		1・2	春学期	非常勤
	書道基礎実習Ｃ（行書）	1		1・2	秋学期	非常勤
	絵画基礎実習Ⅰ（入門）	1		1・2	春学期	専任 茂木　一司
	絵画基礎実習Ⅱ（応用）	1		1・2	秋学期	茂木　一司
	デザイン基礎実習Ⅰ（入門）	1		1・2	春学期 秋学期	専任 茂木　一司
	デザイン基礎実習Ⅱ（応用）	1		1・2	秋学期	非常勤
	彫刻基礎実習Ⅰ（入門）	1		1・2	春学期	非常勤
	彫刻基礎実習Ⅱ（応用）	1		1・2	秋学期	非常勤
	工芸基礎実習Ⅰ（入門）	1		1・2	春学期	非常勤
	工芸基礎実習Ⅱ（応用）	1		1・2	秋学期	専任

表１　基礎実習科目

実技（実習）科目重視の考え方は学校の創始者である跡見花蹊の「智育徳育はもちろん体育にも注目し、さらには婦人として不可欠な家政についても多大な考慮を払いながら、学校を通じて優美な情操を養い、品位ある節度ある女子を育成する」という総合教養型の教育方針に根拠がある。花蹊は自身が書や絵画を学修し、「日本の伝統文化を踏まえた豊かな教養と自由な精神を持つ自立した女性を育てようと」、その中心に美育をおいたのではないかと思う。美術等の基礎実習の他に、文学部共通科目には華道や茶道の実習があり、この理念を具体化している。

２　美術の基礎／教育とは何か：インクルーシブアート教育の視点より

筆者は長年美術教育の基礎とは何かを探求してきた。その探究の成果として「構成教育の史的研究－イギリスの基礎デザイン運動：ビクター・パスモアとリチャード・ハミルトンの教育－」（九州芸術工科大学博士課程学位論文、平成10年１月）（茂木、1998）にまとめた。その動機は出身の筑波大学の構成教育で体験した「あらゆる造形の基礎としての構成教育を追求していく中で、〈基礎は専門になるのか〉」という疑問だった。詳細は省略するが、簡単にいうと構成主義的（主に幾何学的抽象）作品の制作はすでに基礎ではなく、基礎はあくまで作品になる前の研究（探究）の中に在るもので、自分の構成教育研究はどこに向かえばいいのかわからなくなってしまったということだった。周知のように構成教育とはBauhausの基礎教育としてはじまったBasic designが昭和初期に日本に輸入され、専門デザイン教育から普通教育まで広まった運動で、筆者はBauhausの「教育体系と造形理論

は世界中のデザイン学校に何らかの形で影響を与えた」（宮島久夫、1971）という指摘を全世界的に後づけたいと考え、英国留学時（1990）に偶然出会った英国の1950～60年代に起こったBasic design運動の資料を分析して、Bauhausの影響関係に関する英国での事例研究として博論にまとめた。

美術教育の基礎に関する歴史研究から多くの示唆を受けた。同時にその時すでに15年以上地方の教育学部に勤務し、美術科教育つまり学校の図工美術教育とそれに対応する教員養成美術教育の現状を体験する中で、この国の美術科教育もしくは美術教員養成の具体的な問題解決を図る必要性を強く感じていた。すなわち、美術科教育（学校の図工美術教育）が縮小され、専任教員も削減される中で、授業時間が週２時間にも満たない図工美術教育にとって、（本意ではないが）否が応でも美術科教育のミニマルエッセンシャルズを考えざるを得ないこと、それに対応する美術教師教育の内容の現代化と厳選を図っていく必要があること、それが美術教育の基礎の研究の基盤となるべきと考えた。

「何をやったら美術教育になるのか」は難しい問いだ。鉛筆を手に持って意識的・無意識的に動かせば線はできてしまう。それは美術なのか？多くの美術ぎらいが一様に言う「自分は絵が（うまく）描けない」を否定し、美術ってそういうことじゃないと指導者として言い返すためには、美術科教育をより本質的に問うことが必要であり、すなわち「美術教育の基礎」の探究とは部分的な対処ではなく、「美術（アート）／教育とは何か」という全体を明らかにすることと同義であった。つまり、「美術教育の基礎とは何か」とは表面的な対処療法では問題解決できない、「（人間とその学習環境が織りなす関係性の構造体である）教育全体の問題解決のこと」であり、「基礎を考えることは教育を考えること」そのものであった。（博論で考察したこのプロセスの詳細を説明することはできないが）一般に基礎を下部に位置づけ、その上に応用を乗せた発展的な構造体（教育で言えば、発達論的なプログラム）をイメージしがちだが、そのようなリニアな捉え方には問題もある。例えばDeleuze（Deleuze, G., 1925–95）＝Guattari（Guattari, P.F., 1930–92）の「リゾーム（rhizome）」概念のように、固定的な幹（中心）を持つ階層的なものを象徴する樹木（tree）構造を批判し，中心を持たず異質な線が交錯し合う「生成する異質性」モデルで上意下達的な階層を持たないような、そこに「在る」ことはわかっていても見えない（量子論的な）「場」のゆらぎのように捉えることもできる。

基礎のイメージはこのように固定化しにくい。博論で得た結論は、構成教育すなわち造形の基礎教育とは「発展するプロセス（Developing process）」と「継続するプロセス（Continuing process）」であった。英国のBasic design運動は他国がBauhausを同時代に受容していったのに対して、英国の保守的な性格から1950年台以降にずれ込み、そのおかげで20世紀初期の単純な抽象美術教育でなく、（ハミルトンが主導した）Pop artなどの新しいアートを美術教育の基礎に必然的に持ち込んだ。筆者は教育における基礎を通常「不易な＝絶対的もの」と考えられてきたものを「変化する／していいもの」として再定義した。変化とは「動くもの」「曖昧なもの」であることを認めることでもあるが、それはけっして本質から逸脱することではない。すなわち、何かの基礎教育とは高度な専門性を子ども向けにやさしく簡単にして与えようとするものではなく、物事のエッセンスを特定し、それに至る

プロセスを明らかにし、それらのすべてを包摂する教育／学習という営為の全体像を求めていく活動に他ならない。

現代はさまざまな分野・領域で細分化・専門化が進み、早く効率よく物事が処理されなおかつ正確で客観的であることが評価される社会になっている。しかしながら、そこからこぼれ落ちる多くの豊かさがあることも周知である。障害もその１つで、近代は効率とスピード＝経済性に偏り、障害(者)は基準から外れ疎外されている。筆者は長らく障害児の美術教育研究を通して、障害のあるなしによって「分ける」ことの弊害を強く感じ、今後の共生社会構築のためのインクルーシブ教育の推進を差異や多様性を活かしながら想像的創造的な世界を構築できるアートを用いた学びを「インクルーシブアート教育／学習」（造語）として提案してきた（茂木、2018、2019他）。主張の趣旨は、アートはインクルーシブ社会の基礎になるべきではないか、 その意味はアートが(科学によって)「断片化」（D.ボーム）し冷たくなった部分を感情（心）によって暖めつなぎ直し、全体性を恢復し調和を図るということである。すなわち、基礎を包摂する全体そのものと捉える視点が必要ということである。

だいぶ遠回りになったが、基礎の探究とは単なる方法論として早くうまくやることではなく、結果的に全体（性）を見つめ直すことであり、それは私たちが自分らしく生きるための身体性の恢復である。すなわち、アート/教育とはすべての人が個人として自立し、社会の中で自由に自己表現をでき、全体の中で調和しながら生きる人間を育てる大きな目的を持ち、自己と他者や社会との関係性を調和的に図るレッスンとも言えるのである。絵画教育も同様にうまく絵を描く技術の習得ではなく、自分と相手（世界）との間を実践する営みと捉えることができる。

3　絵画基礎実習Ⅰ（入門）のカリキュラムの目的と授業の概要

筆者は当初毎週１回で15回の授業の組み立てをアカデミックな絵画教育でと考えていた。それは着任早々でもあり、前任者のシラバスの達成目標を引き継ごうと考えたからである[1)]。しかし実際はコロナ禍で、学生は対面とオンラインを各週半数交代で実習することになってしまって、その授業形式は実質的にオンライン組を切り捨てることになり、やむなく集中講義にしたため３日間の連続したワークショップが可能になった。授業は2021年８月23日(月)～25日(水)に30時間で実施した。受講生は13名（１年生６名、２年生７名）であった。

カリキュラムの概要は、以下のようである。

１日目：ガイダンスと講義、アイスブレイク、導入ワークショップ、スクラッチコラージュ
２日目：①絵画ワークショップ：なぐりがき、②同：ぬらし絵、③同：花を描く
３日目：④絵画ワークショップ：水彩による静物画

最初に絵画教育の目的を講義した。前述のように、遠回りでも「芸術（アート）とは何か。どのように捉えて、しかも実践していったらいいのか」を考えてもらうために、筆者が現在取り組んでいる

図１　文化芸術による社会包摂

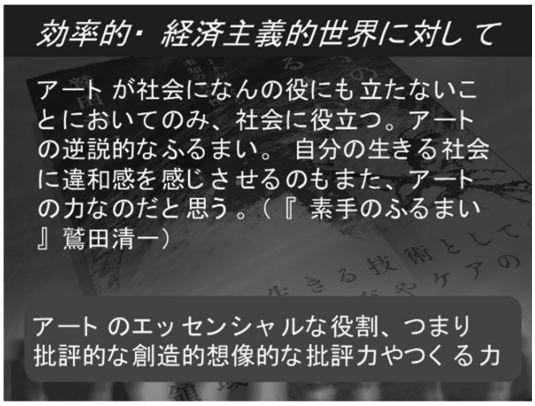

図２　鷲田清一によるアートの定義

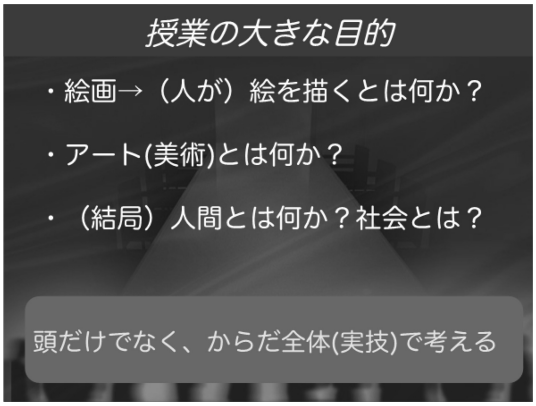

図３　絵画基礎実習の目的

「アートによる社会包摂」から「アートが多様性の確保、他者理解やコミュニケーション機能によって、個人をエンパワーメントし、社会的関係性を再構築し、全体的に生活の質を向上させ、最終的には持続可能な共生社会構築の基盤となる（べき)」ことを最初に話した。それは直接的な経済支援などと違うアート独自の力、すなわち現代社会を覆う「効率的で経済主義的な思考に対して、アートが直接的に役に立つことを拒否することによって、逆に社会を批判し、違和感を感じ表明できる力になる」ことを伝えた。

最初の講義の部分は表面的な理解でもいい、むしろいったん忘れることが重要である。しかし、この最初の言葉は最後まで一貫してこれから「描く（活動を続ける）身体」のどこかの核に残り続ける。最初から絵をどう描くかという方法論から入ってしまえば、絵画（芸術）の意味を考えないで描く身体が継続する。絵画教育はただの身体の実技ではなく、言葉（テキスト）と絵（イメージ）で考えるレッスンになる。そして最も大切なのは「楽しく描くこと」であり、これを忘れないように！とも。

3.1　アイスブレイクとしての絵画ワークショップ

話しが前後するが、授業のはじめは初対面の人たちの出会いを演出し、関係性をほぐす、いわゆるアイスブレイクと呼ばれるワークを用いる。この活動は時間が経てば自然にほぐれてくるのであえて必要はないと考えることもできるが、筆者は円座になって、５秒間自己紹介をよくやる。ワークショップを教える講義では円座になる意味が初対面の人たちを確認する場であり、この場が安全かどうかを話す／聞くことで確認するなどを説明するが、ここでは単純に「朝食べたものを紹介する」など自由な発言から、時計回りに順に話してもらう。だいたい３巡くらいするとかなり参加者の性格などもわかってきて、いい雰囲気になってくる。この活動では話しを聴くことの大切さを理解すること、聴ける身体をつくることを目的としている。

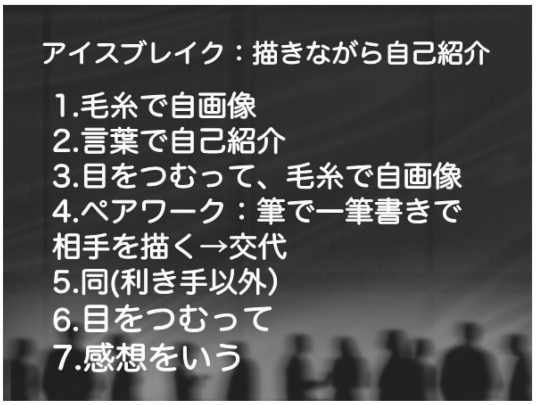

図４　描くアイスブレイク

次のアイスブレイクは実際に描くワークを通して行う。これも自己紹介の一環でもあり、「描きながら自己紹介」する課題だ。図４にあるように、A３の紙の上に太めの毛糸を上から垂らしたり、置いたりしながら自画像をつくることが第１の課題である。鏡やスマホを使ってもいいし、やり方は指示しないが結構難しい課題だ。できあがったら、またどんな自分を表現したかを言葉にする。「やさしい性格」「緊張している今の自分」…など。

次は目をつむって、毛糸で同じように自画像をつくってみる。図５を見ると目を開けてつくった自画像の記憶を再現していることがわかる。この練習は次の一筆書きのための前振りである。描くときに描画材を離さない訓練は線を美しく引くための基礎になる。途切れ途切れではねた草のような線は自信のない初心者によく見られる表現であるが、描き続けるという強い意志を紙の上に置く訓練によって、作者の魂が紙を引きつけ線を乗せていくような運動を定着させる。それは作者が描いているの

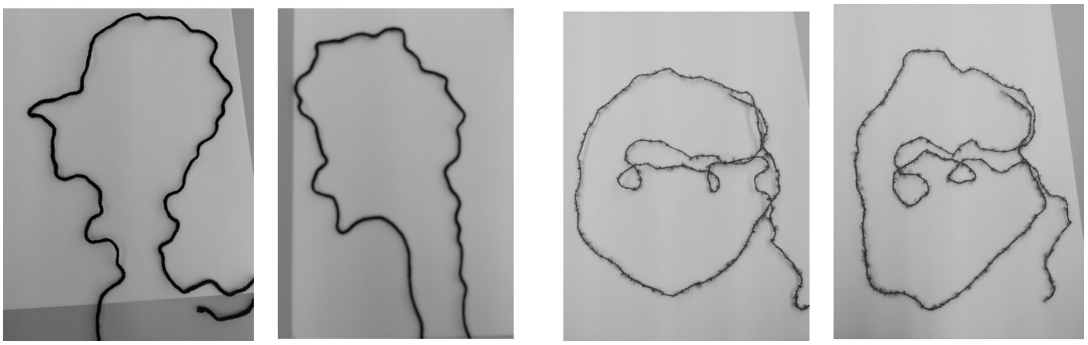

図５－１・５－２　毛糸の自画像（左：目を開けて・右：目を閉じて）

か、あるいは作者は何か強い力によって描かされているのかわからないような感覚の表現になる。

抽象的な説明になってしまったが、線を引く運動はつまり意思の訓練になる。次はクレヨンによるペアワークである。ペアでするのはコミュニケーションの学びのためである。最初はよく見て、相手を一筆書きで描く課題。毛糸は自然に一筆書きになるが、クレヨンはどうしても紙から離れてしまう。受講生の中には一度で輪郭線を決定しなければならないと思っている、いわゆる正解探しからなかなな抜け出せない人がいる。そこで、「一度紙の上に置いたらクレヨンを離さないように…同じところを何度も往復してもいいよ」と注意を促した。図６は目を開けて描いた絵の上に目を閉じて描いた絵を重ねて描いている作品である。どのように変化したかがわかりやすいので試してみた。何枚か描いたので、少し慣れてきているのがわかる。大切なのは正確にとかうまくとか描こうと思わずに、クレヨンを紙から離さずに気持ちよく線描することである（頭で考えないで手を動かす）。その後、利き手を変えて左手等で描く、目をつむって描くなどを短時間でやっていく。１つのワークは長くても５分程度、本当は１分程度で描かせることが頭を使わせないで描くポイントになる。ワークショップでは即興性と身体性が力を発揮する。この２つのワークショップを回すエンジンは身体が思考のように自由にならないことを身をもって体験させ、頭でっかちな現代の私たち（人間）を再考させる意味がある。受講生の感想には、「毛糸を使って絵を描いているとき、一筆書きで描くのは難しいと思いました。しかしその後、目をつむってクレヨンで絵を描いたとき、毛糸を使って描く時の利点が理解できました。クレヨンでは、自分が描いた線を上手く把握できず、目を開けなければどのような絵になっているのかがわかりません。しかし毛糸であれば、手の感覚である程度の位置関係を頭の中に思い浮かべる事ができます。慣れることができれば、視覚を使わずとも絵を頭の中に思い描けると思いました」とある。

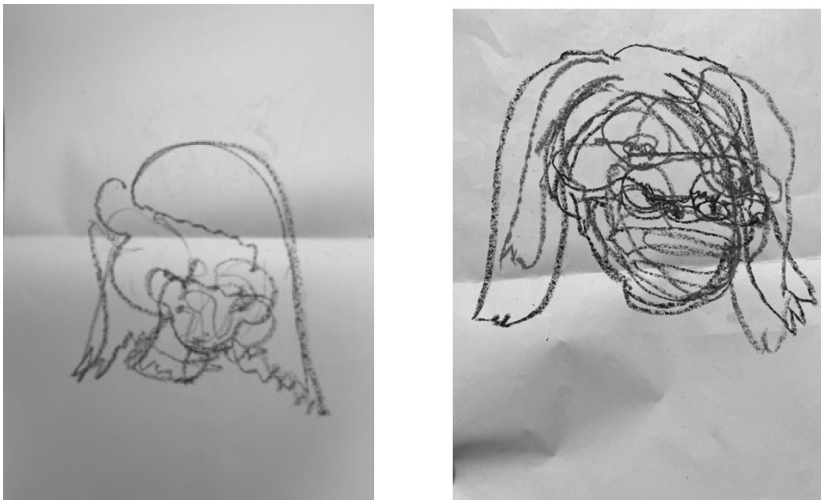

図６　クレヨンの一筆書きによる自画像（見て描いた絵の上に、見ないで描いた絵を重ねる）

3.2　アイスブレイクとしてのスクラッチコラージュ

初日の午後は、いわゆるモダンテニックのスクラッチとそれを素材にしたコラージュをやってもらった。目的は技能訓練によらない探究的な学習で表現の幅を広げることである。モダンテクニックとは、20世紀初頭にシュールレアリスムの作家たちが好んで用いた造形技法で、すべてを自分の意思でコントロールできないオートマティズム（自動書記）＝偶然性を持つ造形に特徴がある。とりわけエルンスト（独、Max Ernst, 1891–1976）は印刷物などから切りとったイメージを自由に配置する「コラージュ」やフランス語の「frotter（こする）」の語に由来する「フロッタージュ」と自身が名付けた技法を生み出し発展させた。ワークショップでは最初にフロッタージュをコラージュにすることを説明しなかった。それはその時々の学習に集中させ、拡散的思考を促すためである。

「フロッタージュでは、凸凹したものの上に紙を置いて鉛筆でこするという技法は子どもの頃によくやっていたので、小学生に戻った気分でとても楽しかったです。校舎の中や外を歩き回って探していると、様々な模様や形、凹凸があり、私たちが普段気にしていないだけで身の回りにはたくさんの模様があることが分かりました。…探していた時は、その模様をどのようにコラージュしてどんな作品を作ろうか全く決まっていなかったけれど、中庭のテーブルの模様が目を引き、かき氷の器に見えたのでそれに決まりました。それぞれの素材を活かして組み合わせたり、色を塗ったりしてとても楽しんで作業をすることができました。」

「フロッタージュでは、柄を意識して学校内を探索したのが、とても新鮮な体験でした。絵をただ描くのではなく、自分で動いて素材を見つけるのがとても楽しかったです。普段何気なく使っている物にも作品にできる要素が沢山あることがわかりました。他の人の作品を鑑賞して、あの柄は何の柄だったのだろう、あれは私もこすった柄だなと作品を見るのが楽しかったです。」

感想にもあるように、フロッタージュによる探究学習のよさは「日常の中にアートをみつけること」である。そして、やったことを使って次の活動を発展させていくことである。うまくいかなかったという感想には、「フロッタージュしたものを私は上手く模様として生かすことが出来ませんでした。その原因は、フロッタージュしたものやその形にとらわれ過ぎていたことです」とある。アートは制作のプロセスの中にあるのであって、結果にあるのではないことを伝えなければならないと考えている。

3.3　ドローイング（なぐりがき）とペインティング（ぬらし絵）及び想像画（花の絵）

２日目の午前は、４つ切りの画用紙に60分間ひたすらクレヨンでなぐりがき（線描）をし続けるという課題から始まった。初日の一筆書きを発展させた課題でもあり、これによって「描くとは何か」という感覚を味わってもらいたいという表現活動でもある。20世紀以降のアートの変容に伴って絵画の定義づけは非常に難しくなってしまったが､教育の視点からいくつか押さえるべきポイントがある。それは絵画が線を引く（drawing）と色を塗る（painting）の２つの営みから成り立っていることであ

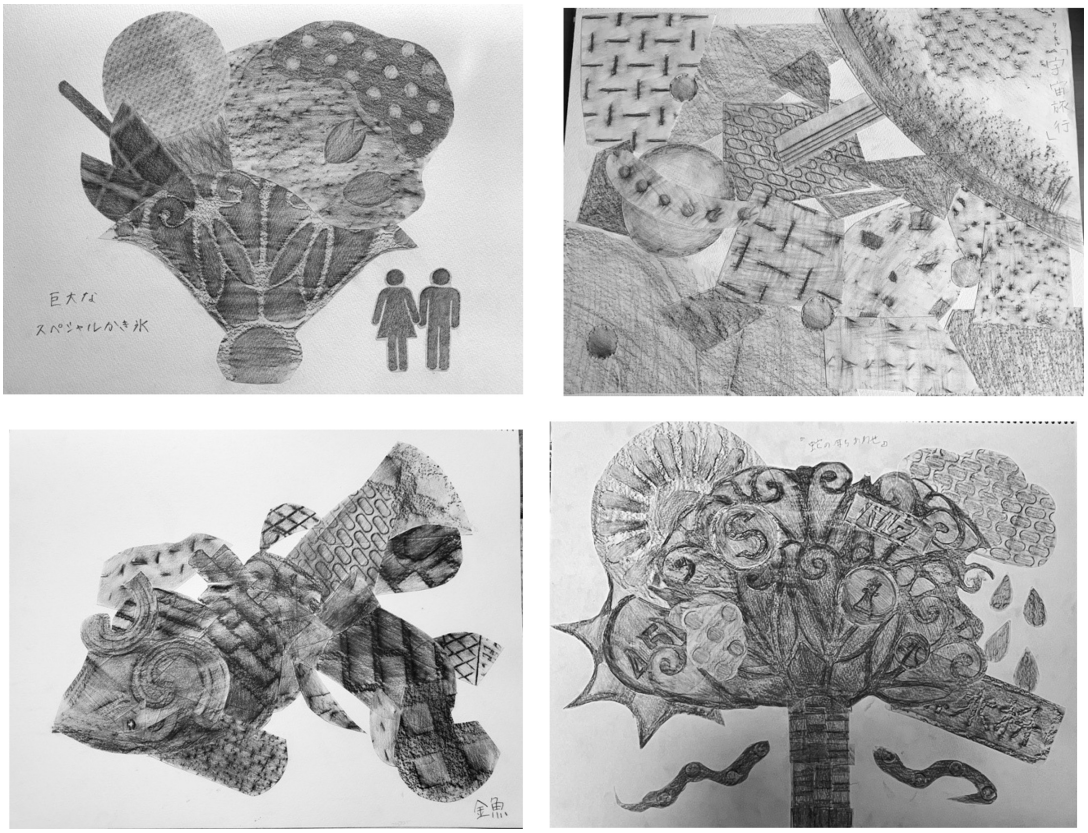

図７　スクラッチコラージュ作品例

る。まず、この２つの要素を体験的に学ぶための課題が「なぐりがき」と「ぬらし絵」である。

「なぐりがき」の手順は、画用紙の四隅をテープで固定し、画用紙を正面真ん中において座る。精神を落ちつかせるために目をつむり深呼吸をしてゆっくりと目を開ける。少し腕や肩、首などの準備体操をしてから、机に置いたクレヨンを親指と人差し指でつまんでそのまま軽く持ったまま、まず空中に円を描いてみる。クレヨンを徐々に画用紙の上まで持ってきて、紙の上すれすれで回し続ける。ようやく紙の上に線を乗せるように描き始める。最初は黄などの薄めの色を選んで，ゆっくりと描き続ける。ある程度色が着いたら、色を変える。その時、画用紙に置かれた色が何色を欲しているのかをよく聴いて次の色を決めていく。疲れたら利き手を変え、色も変える。目をつむってもいい。時には両手で２本のクレヨンを持って描いたり、正円ではなく、八の字（無限形）を描くなど、リズムを大切にしながら描き続ける。これらを繰り返しながら、約60分のワークが継続する。この活動でもうひとつ大事なことは、線を画用紙の外にはみ出して描くということである。普段できないこの行為は自分が枠からはみ出せるというアンラーニングにつながる。

「クレヨンの作業では「本当に難しく考えず感じたままに描く」という幼い子供の頃の絵を描く喜びを微かに思い出すことができ、面白かったです。」
「クレパスで線を描き続ける活動では、無駄な力を抜いて線を引く感覚を知り、色を変えて塗り重ねていくことで色の層が生まれてくることのおもしろさを感じました。」
「クレヨンを使って円をひたすら描くという実習では…60分間も描き続けたのに体感では10分ぐらいに感じたのでとても不思議でした。初めは真っ白な紙に描き始めるので、どのように描いたらいいのだろうと迷いながら体も硬くなっていたと思います。しかし、描き続けていくうちに体の力も抜けていった気がしたし､紙からはみ出ても良いという考えを持ち始めたのでとても楽になっていきました。また、クレヨンの色を変えたときに色の変化や全体の色味が一気に変わったのが綺麗で面白かったです。紙が求めている色を次々と変えていき遊びの感覚で描き続けることができました。先生が絵画は時間をかけて作るものだとおっしゃっていて、たしかに時間をかければかけるほど自分の納得のいく作品ができるし、より面白い作品に仕上がると感じました。生徒それぞれが全く違う作品を作っていて、色合いも全く違かったのでそこもとても面白いなと思いました。」
「クレヨンによるドローイングでは、最後の方では力を抜いて描くことができた。しかし、最初は頭の中で構成を考えてしまったり、肩の力が入ったまま描いていたりしていたため、つまらないものとなってしまったと思う。また、色のことをあまり考えず描いていたため、濁った色の作品ができてしまった。自分の心の中が投影されたようで直視できなかった。受講生の方々の作品は人それぞれ個性があり、きれいで素敵だった。」

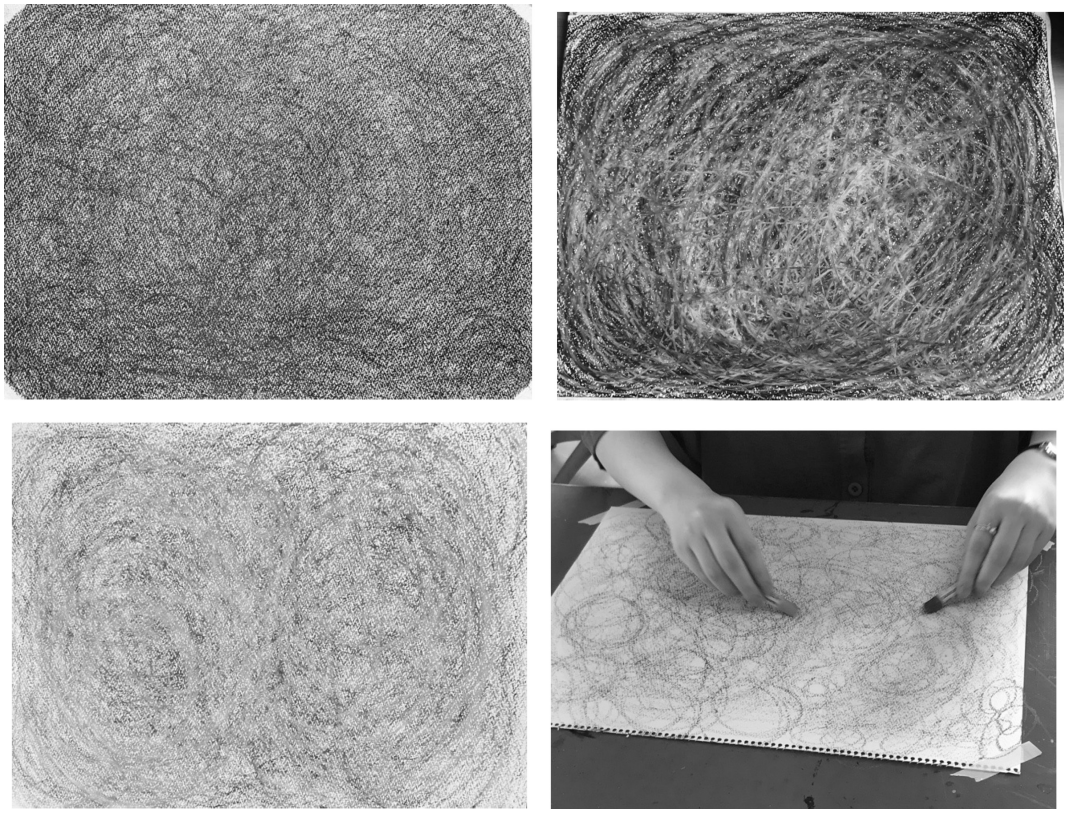

図８　クレヨンドローイングの作品例（同じ表現行為をしても個人差が大きくでることを時間の経過が示す）

素朴な感想から、失敗したというものまで幅広い感想が聞かれたが、大切なのは自分なりという感覚であろう。他者と比較していい悪いを判断しないように指導に注意を払いたい。

「ぬらし絵 painting」はスポンジに水をたっぷり含ませ、紙を傷つけないようにたわみのように机に吸着させるように置くことから始める。この時に紙の裏表に注意が必要だ。裏に描くと紙がぼろぼろになって剥落する。この課題は楽しい。なぜなら濡れた画面の上に置くと色が一気に広がる瞬間の美しさを体験できるからである。

「紙を濡らして三原色で自由に色を紙に乗せていく作業では、紙に色を乗せたとき、花が咲くように色が広がっていくのが見ていてキレイだと感じました。乾くとまた違った作品に見えました。」
「一番何も考えず作品を作ることが出来たと思う。水の上で広がる絵具はとても美しく、いつまでも見ていられそうであった。最初は周りの様子を伺いながらやっていたため、あまり面白い作品を作ることができなかったことができなかったことだ。グラデーションがきれいで、癒された。」

しかし中には「にじみ絵は想像以上に自分の思う通りにできず、個人的には一番難しいと感じていましたが、描いているときと乾いた後とで全く違った姿を見せるのはとても興味深くもう少し練習し

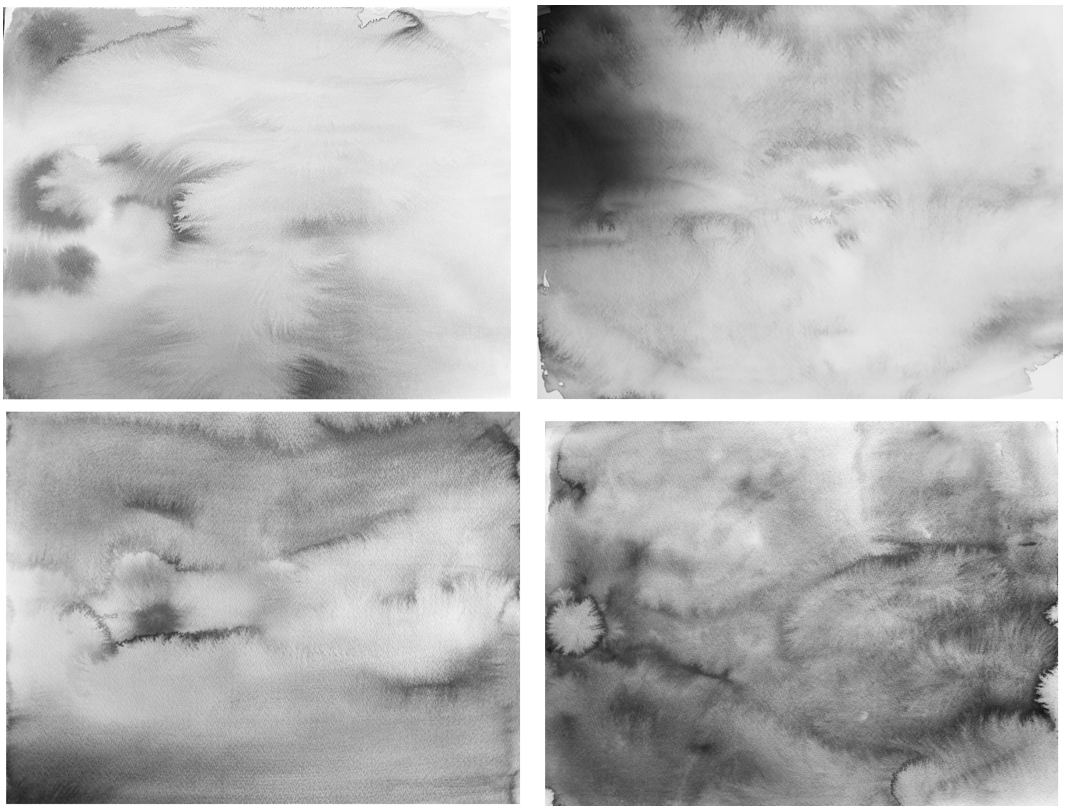

図９　ぬらし絵の作品例（濡れた状態と乾いた状態では全く印象が違うこと知る）

てみたくなりました」という感想もあって、感じ方の違いを知ることになった。

線を引く活動と色を塗る活動には同じ絵画でもまったく違う意味がある。線描は白紙に自分の意思を明確に刻印する行為で知的な活動であるのに対して、着色は色彩が感情に直接働きかけるという意味で感覚的感性的な行為である。絵画学習とはこの２つを統合しながら学ぶ活動ということになる。

「想像の花を描く」課題を次にやった。この課題にはやはり絵画学習の基礎が「観察表現」と「想像表現」であることを理解する意味がある。通常は観察表現だけを基礎として学ぶのであるが、想像表現から導入されるのがいいと思っている。その理由は、観察表現のデッサンや色のバルールなどの学習はどうしても技能訓練になって、描くことが苦手な人により自信をなくさせるからである。アート（に限らないが）はまず楽しく学ぶことを優先し、自分らしさを探究できる創造的な自己を鍛えていくことが特に必要である。「想像の花」とはつまり「好きな花」であり、「好きなように描いてもいい空想の花」である。また、「ぬらし絵」の技法（オートマティズム）を使ってもいいように、なる

図10 「想像の花を描こう」の作品例（急に個性的な表現になる）

べく技能差がでないような配慮もある。したがって、

「花の水彩画ではリアルに花を描いている方も、抽象的に描いている方もいてどれもきれいであった。その人自身を表しているようであった。」
「個人的に一番上手にできたなと思ったのは、透明水彩を意識して花を描く作業でした。花を思い浮かべたとき、特定の花が思い浮かばなかったので、花の印象を思い浮かべて描きました。花の優しくて温かい雰囲気を上手く描けることができたと思います。こういう花があったら面白いだろうな、とねつ造して描くのが楽しかったです。水を少なくしたり、多くしたり、水を意識して描くのは難しかったですが、上手く色が乗ったときはとても達成感がありました。」
「自分が思う花のイメージを絵にするということをやり、イメージして描くということは少し難しかったけれど、自由に想像して描きました。私は花をイメージした時にひまわり畑が一番最初に浮かんだので、ひまわりを描くことにしました。ひまわりはたくさんあって家族みたいだと感じたのと、私にとって元気と幸せをくれる花だと思っているので、そのイメージを上手く表現することができました。しかし、水彩画ならではの色味や透明感は上手く出すことができなくて難しかったです。ペインティングを始める前に見た動画では、花の印象的なところを大きく主張して描いていて、絵だからこそそのような実際にはあり得ない花を描くことができるのだと思いました。また、絵は様々な感情を生み出すものであると考えました。私以外の生徒の作品はそれぞれがとても素敵で人によって個性があって面白かったし、とても良い刺激になりました。」

3.3　静物画（透明水彩）の課題

３日目（最終日）は一日かけて、オーソドックスな水彩画をやった。つまり、絵画の基本とされる観察表現の課題である。他の課題もそうであるが、説明はなるべく映像を見せて具体的な手順を示した。映像メディアに生きる現代っ子である彼女たちには言葉の説明だけでは理解が難しいのではと最近特に感じる。映像を見るとイメージが固定化される恐れもあるが、まったくの未経験者にはモデルが必要と考える。youtube から適当な水彩画の描く方のビデオを選んでかいつまんで見せ、最初にあたりをつけるための輪郭線とそれを絵の具で修正しながら光と影のせめぎ合い（戦い）をつくりながら、表現したいもの（こと）を強弱、リズム、奥行き、運動、空間などの調整をはかり、影の部分には寒色だけでなく暖色も少し加えながら仕上げていく手法（こつ）や失敗（塗り間違い）を水で洗い流して修正できるので画面上で丁寧に試行錯誤を繰り返すことを伝えた。しかしながら、観察による表現では描き方よりもものの見方・考え方を学ぶことが本当の主題になる。受講生は描かなくてはいけないとばかり思い込んでいる、もしくは描くことが水彩画の学習だと思い込んでいるので「見るということが見えない」のである。「感じること＋やってみること＋考えること」を往還しながら見る／観ることを大切にすることを体験的に理解してもらうように進めていく。

受講生は４人程度のグループでモチーフを自由に組んで描き始める。モチーフはプラスティックの果物や野菜、透明な瓶類、ドライフラワーと下に敷く布類で構成させた。構図は高い瓶などを中心にした基本的な三角の構図を伝え、画面上で動かしてバランスを調整するように指示した。

「水彩画で、色を重ねるべき場所と、白として残す場所を意識しながら描くのは難しいと思いました。絵の具で色を塗るとき、特に瓶の透明感の表現が難しかったですが、所々に濃い色を伸ばさずに置いてみると、良い感じになったと思います。さらに、先生のアドバイス通りに白を入れてみると、少量にもかかわらず、一気に透明感が増したように感じました。また遠目で見ると全体的にぼやけてしまい、締まりのない感じになっていたのですが、影の色を濃くすると形がくっきりしてきたので良かったと思いました。」
「水彩画では、特に便の光と影をとらえることが難しく、上手くできませんでした。しかし、物の色を表現するときに一見真逆に見える色でも重ねてみると違和感なく逆に深みを出せるということを知り、驚きました。」
「三日目の静止画（ママ）では、とても難しく上手くいかないことが多かったです。しかし、物をよく見てなんとか描くことができました。まだまだバランスを取ること、色を重ねていくことを学ばないといけないですが、今の自分の最大の力で描ける作品になりました。…授業で作品を制作するにあたって、自分のセンスや発想力が求められるなと感じました。私は制作をするときに深く考えすぎてしまって、どうしようと慌ててしまうときがあるので、落ち着いて自分が何を作りたいか、感じるままに作品を作っていこうと今回の授業を受けて思いました。授業で作品を制作したあと、他の人の作品を鑑賞するのがとても勉強になりました。他の人がどのような思いで制作したのか、発想やその人が感じた難しいと思ったところに共感を持ちました。特に三日目の静止画（ママ）作成では、同じものを４人でデッサンしたのに、見える場面によって様々な描き方になってその人らしい作品にできあがるのがとても面白いなと思いました。また、そういう色を塗るとキレイに見える、そこは影ができるのか、と沢山学ばせてもらいました。」
「初めに小物を設置したりイーゼルを使ったりと、絵描きみたいで楽しかったです。小物は違った大きさやテクスチャーの物三つを三角形の構図に置くことが大切だということを学びました。実習の前の動画を見てその通りにペインティングしてみたけれど、思っていた以上に難しくなかなかうまくいきませんでした。個体で色を塗るのではなく、全体的に塗っていくことによって全体の色味が同じような作品になるということが分かりました。私はビンと果物を描いたのですが、ビンと果物に奥行きがなく、影を上手くつけることが難しかったです。しかし、ビンはいろんな色を組み合わせて透明感のあるものが描けたのではないかと思いました。描いていくうちに段々と仕上がってきて立体的に見えたり、綺麗に見えてくるのが面白くて水彩画の魅力を感じました。もっと上手く描けるようにまた挑戦したいと思いました。」

２日間いわゆる概念崩しを時間をかけてやってきたが、水彩画は幼少の頃から経験しているので、その経験値が邪魔をして自由に描くことを疎外しているように感じる。岡本太郎ではないが「芸術はうまくあってはいけない」ことをどのように理解するのかが（絵画）制作のポイントになる。しかしながら、各自差はあるが自分なりに殻を破る経験をしていたようにも感じる。

4　まとめにかえて

最後に、全体の感想をランダムに拾い上げてまとめとしたい。

「私は絵画とは、その人自身であることが今回の講義を受けてわかった。自分の考えていることがそのまま投影され、私の場合は雑な線で、濁った色になるのだ。また、アート（美術）とは、世界共通のコミュニケーションツールであると思う。なぜならアート作品を作る人は世界中にいるため、みん

図11 「静物画（透明水彩）」の作品例（やはり水彩画の経験が余計にうまく描こうという方向に働くようだ）

なで繋がることができると考えるからだ。文章でも絵画でも相手に伝えようとすることは自分を表そうとしている行動であるためだ。最後に、表現することとは、言葉にできない曖昧な、もやもやした思いや、自分の内面を相手に伝えることだと考えた。私は講義を受け、できない自分を恥じて落ち込んだ。しかし、つたない絵を描くことで浮き上がった自分を人に見られるのはとても恥ずかしかったが、自分の内面を知ることができた。絵を描くこと以外でも、勉強や習い事などで、今まで私はレベルの低い本当の自分を認めたくないために、自分と向き合うことを避けていた。このままずっと自分を嫌い続けては、生きにくい人生を送ってしまうと思ったため、これから少しずつ自分を認めていこうと心に決めた。」

「今まで自分が取り組んだことの無い感覚を優先した内容が多かったため、これはこういう風に描かなければならないという先入観が少し無くなったように思いました。…先生が授業の最後に仰っていた絵は自分自身を表すものというのが、まさにその通りだと思いました。基礎は確かに大事ですし学ぶべきではありますが、最終的には上手い下手より、これが自分の絵なのだと自信をもって表現することが大切なのだと思います。今回初めて絵の具で絵を描くのが少し楽しいと思えました。今までみんなみたいに上手く描けないからと、中学生の頃から授業で課題が出る度に悩んでいたのですが、物の見方、捉え方を変えるだけで描き方も出来栄えもかなり変わり、美術に正解は無いのだなと改めて実感しました。これからも自分の描きたいもの描けるようになりたいという気持ちは変わりませんが、…自分が好きだと思える絵を描けるようになりたいという気持ちになりました。自分の気持ちや好きな感性を見える形にすることが表現することなのかなと思います。」

「今まではうまく描く＝写実的に描くことだと考えていましたが、実習を通して美術作品は必ずしもそうじゃないと気付くことができました。表現の仕方は自分が一番伝えたいことを絵の中に描くことが重要で、うまく描こうと意識しすぎて硬くなっているのではなく、実習でやった左手を使う・目を瞑って描くなど、自分の意識とは別の作品もアートになると気付くことが出来たので、これからはもっと自由に美を捉えて、絵を描きたいと感じました。私は美術科の教員免許取得を目指しているにですが、『絵は上手いからすごい訳ではない。自分の表現したい絵を描くことが重要』ということを伝えていきたいと思いました。」

「最終日に先生がおっしゃったことで、「絵はその人の人格をよく表すものだ」「絵はごまかせない」というお話が強く印象に残りました。自分の描いた絵と他の受講生の皆さんが描いた絵を見比べて、私にはこういう性格があるかもしれないとか、この方はこんな感じの方なのではないかとか色々考えてみるのも楽しかったです。自分の殻を破って自由に描いた絵は、自分ですら知らなかった自分のとても深い部分をも映し出すことがあるのかもしれないとも考えました。

最終的に、美術において最も重要なことは、美しい線でも深みのある色使いでもなく、自分を開放して紙と向き合うことだと思いました。もちろん、人が美しいと感じる構図とか魅力を感じる色の重なりといった理論的な要素が全く無視できるわけではありません。しかし、そういう理論ばかりにとらわれた作品は、視覚的にはどれだけ端正な絵で美しく見えても、直感的な、なんだかよくわからないけどどうにも惹かれるというような魅力には欠けてしまうのではないでしょうか。その逆に、理論を基礎としながらも、描いた人自身を濃く感じさせるような絵は、好き嫌いが分かれるかもしれませんが、見た人の心にぐっと迫ってくるような深みがでてくるのではないかと思います。

極端にいえば、絵画とは、描いた人そのものということができると思います。だから、理論的な面白みに欠ける絵でも、それはそれでその人らしさと受け取ることもできるかもしれません。これまで、絵を描くとき、鑑賞するときには、いかに立体的に描かれているかとか、美しい色合いで描かれているかというような技術的な部分ばかりに着目してきました。今後は、ひとつひとつの絵をより深く楽しむことができそうです。」

「全講義でまずできたことですが、なるべく自身がいい作品だと思える物を楽しみながら作ること、時間内に作業を終わらせられたことです。今回の講義では作品制作を楽しみながら、時間内に作品制作を終わらせることが出来ました。普段絵を描くときは作品を完成させることがなかなかできないの

で、今回の講義ではきちんと終わらせることが出来てよかったと思いました。次にできなかったことですが、作品の具体的な説明や気を付けたことの説明や他の受講生の方と協力すること、体調管理が出来ませんでした。」

「学ぶことが多く、高校の時に習わなかったことが主でした。そのため多くのことを学べてとって良かったと思っています。水彩画において多くの失敗をしましたが、これを次に生かしたいと思います。一緒に受けた方の作品を多く見て、いいところを多く見つけることが出来、そこからも多くのことが学べました。コロナウイルスの勢いがすごい時期に授業に行くために電車に乗ることに少し懐疑的だったのですが、直接会わなければ分からないこと学べなかったことが多く行ったことはいい経験になったと思います。寒色系の色が下に沈むというのは初めて知ることでした。陰に青を入れて青が浮くのではないかと心配していたのですがすごくなじみ立体感が増したことが一番の学びだったと思います。リンゴに青を入れたときにリアル感が出てこれは高校の頃に知りたかったと思いました。水彩画が苦手な原因として修正が効かないことも要因の一つでした。しかし動画を見て水を使えば修正出来ることを知って驚きました。私にとって水は相容れない存在でした。水を余り使わない方が、色がはっきりして重ね塗りしても紙がボロボロにならないと感じそうしていました。今思うとそれは水彩画では無いと思います。油絵の方が好きなんだと思います。水を使って重ね塗りも出来ることがわかり少し好きになりました。」

「私は幼稚園の頃から絵画教室に通っていました。そこの現在90歳ほどになる先生が昔から「うまくなくていい」「下手な絵はない」「太陽は赤とか固定概念に囚われなくていい」などと言っていました。先生も似たようなことをおっしゃっていて驚きました。わたしにとって絵画は子供の頃からの楽しいことでのびのびとやることだと思っています。」

「この三日間の絵画基礎実習を通して、絵画とは時間をかけて作り出すものであり、人々の感情を刺激するものであると考えました。クレヨンでのドローイングを行ったときにも感じたように、時間をかけて作ることによって奥が深い作品ができると思ったからです。また、ワークショップで他の生徒の作品を見た時にそれぞれの作品から描いた人の想いや心が癒されるような思いを感じたので、感情を刺激するものであると考えました。私はそこまで絵が上手ではないので、授業についていけるか不安でしたが、絵は上手に描かなくてはいけないという決まりはないと先生が教えてくださったので、楽しく受けることができました。」

「当たり前のことではありますが、人それぞれ作品が全然違って、雰囲気も作風も人の数だけあって、美術は本当に面白いなと思いました。先生が授業の最後におっしゃった、作品でその人がわかるというのがとても印象に残りました。自分の作品を見て、これが私なのだと思うとなんとなく自分らしさを感じました。自分がどうしてこの作品を制作したのかを言葉にしてみると、より深く自分の作品が好きになれました。もっと上手く作品が制作できたら良いのに、と今まで何度も思ってきましたが、時間をかけて丁寧に作った自分の作品に愛着が湧きました。どの作品を制作するにも、一つ一つに思いを込めて作品を制作することができたと思います。とても集中したので、時間があっという間に過ぎていきました。３日間だけでしたが、美術に沢山触れられ、学ぶことができました。今回の授業で学んだことを忘れずに、沢山の自分らしい作品を作っていこうと思います。」

「三日間を通して、自分自身が毎日新しいことを体験し、普段一人で創作しているときにはないたくさんの他の人の作品も見、新鮮な驚きと楽しみを得ることができてとても楽しかったです。私にとってアートとはあくまで娯楽であり、楽しいものであると思います。美術館や本で絵画を見るのは「楽しいから」。アートについて学ぶのは自分の好きなものを自分で生み出せることが「楽しいから」。絵でもダンスでも表現するのが「楽しいから」やる、というものが思考の根底にあり、段々とそれを忘れてしまうとアートの楽しさも忘れてしまい、離れてしまうのではないか、と思いました。そのため、今回の集中講義は私にとって大きな転換点になりました。今日自分でこう考えたということをまた忘れないようにしたいです。」

「今回の授業を通して、アートは正解のないもの、あるいは人によって違うものだという考え方です。

水彩画を描く授業では、多くの学生が「花」をモチーフに選びました。その花にも、思い入れのある花だったり、季節の花だったり、想像上の花だったりと、それぞれの学生がそれぞれの感覚で選んでいました。そのため、自分にとって良いものを求めるのがアートなのかもしれないと考えました。もう一つアートは、必ずしも美しかったり、写実的である必要はないという考え方です。授業で、クレヨンを使って様々な色で円を重ねた絵を描きました。その絵を描いているとき、新しい色を重ねれば重ねるほどにどす黒い色になっていくにもかかわらず、様々な色が入り交じった深い絵になったと感じました。味わいが出るというのは、このような絵の事を言うのかなと思いました。」
「アート（美術）には、人が人らしく生きるための糧となる力があると思う。特に絵を描くことは、自分を理解する、自分と向き合う手助けになると考える。理由は、私が高校で不登校の時の体験からである。学校に行けないときに絵を描いていた時期があり、最初は現実逃避のようなものだったが、描き続けるうちに、生きるためのエネルギーをためることができ、自分と向き合うことができた。その時の私が自分と向き合うということは、現実と理想のギャップを認めなければならず、とても苦しいことだったので、私は絵を描くということに助けられていたのだと実感することができた。アート（美術）には、表現することで、自分が言語化できないものを視覚化できる力がある。視覚化できることで、自分の性質や課題を見つけることもできる。私は、絵を描くということは、上手に描くことだけが重要ではなく、絵を描くという行為を通して自分を受容していけることが大切なのだと思う。これらより、アート（美術）とは、毎日に生活の必須ではなくても、生きる過程において大事にされるべきものだと考える。」
「私は絵画とは、その人自身であることが今回の講義を受けてわかった。自分の考えていることがそのまま投影され、私の場合は雑な線で、濁った色になるのだ。また、アート（美術）とは、世界共通のコミュニケーションツールであると思う。なぜならアート作品を作る人は世界中にいるため、みんなで繋がることができると考えるからだ。文章でも絵画でも相手に伝えようとすることは自分を表そうとしている行動であるためだ。最後に、表現することとは、言葉にできない曖昧な、もやもやした思いや、自分の内面を相手に伝えることだと考えた。私は講義を受け、できない自分を恥じて落ち込んだ。しかし、つたない絵を描くことで浮き上がった自分を人に見られるのはとても恥ずかしかったが、自分の内面を知ることができた。絵を描くこと以外でも、勉強や習い事などで、今まで私はレベルの低い本当の自分を認めたくないために、自分と向き合うことを避けていた。このままずっと自分を嫌い続けては、生きにくい人生を送ってしまうと思ったため、これから少しずつ自分を認めていこうと心に決めた。」

長々と感想を列挙したが、いいところだけを抜粋したくなかったのであえて長文のまま掲載した。私の講義と実習は個々人の状態によって、意図したように、正解不正解ではなくグレーネスに伝わったことがわかる。①アート（芸術）とは個（が自分とは何か）の内側への深い探求であるとともに、それが外側の世界との照応になっていることを体験すること、②アート（芸術）はコミュニケーションツールになり、人のつながりをつくり、それは人間にとって自分の存在確認に不可欠であること、③アート（美術）はもやもやした言語化できないものを捉え表現する力があり、同時に（あえて）言語化して伝えようとすることにもまた意味があること。それはわかることだけを受容するのでなく、わからないことへの想像力を増幅させ、自分や他者を／に優しくする／させること、そして④アート（美術）は技能ではなく、うまい下手ではないこと…。絵を描くことは複数の解釈を作りだしてしまった自分が世界の中で宙ぶらりんになること、つまり最大限の曖昧さを受け入れ、その状態を持続しながら発展させて生きていくことを黙って宣言することになるはずである。その中で素の自分を時々

みることができるのではないかと思う。現代に必要なのは「他者との関係性の中にある自己」[2)]、すなわち「ケア」の倫理のようなものに触れることではないかと思う。

今回の授業でできなかったことをあげておく。まず、時間的な制約の中で、最後の静物画（観察による表現）をもっと分解してスモールステップにし、同時に大きな目標（たとえば楽しく描く等）と照応／往還させていけば絵画学習の概念崩しがもう少し進んだのではないかと感じる。さらに、コロナ渦の非接触が対話の機会を奪ってしまい、描くという活動化とそれを説明したり振り返ったりする言語化のバランスがうまく取れなかったことも残念であった。さらに、形の学習に必要な動作化や身体化もできずに、腕と頭を中心になってしまったことも反省点である。オンラインのグループウエアなどでふり返り（対話・言語化）することを考えていきたい。

最後になるが、絵を描くという授業にはどんな意味があるのか？もちろん教職専門の内容も兼ねているので教育的意味を知ることは大切だが、それ以上に自己との対話であり、戦いであることを知る機会になったはずだ。自分を正直にさらけ出すことは危険であり、恐ろしいことだ。自分ってこんなに弱かったのか、細かいことにこだわりすぎて大きく妥協できない……などなど。しかし、そのことを通してしか自己を確認することはできない。接触が制限される中であえて対面でみっちりやった絵画実習から学んだ受講生の言葉は未熟な面も多々あるが大切にしなければならない芯（核）が各々に存在する。普段美術に接していない人が闇雲にコンプレックスを持ったり、それによって美術を疎外したり／されたりするのは「アートは生きるための（身体表現）レッスンである」ことからすれば残念なことである。表面的な部分にばかりこだわるのではなく、大きな全体（大宇宙）の中で自分がその時どのように必要とされているのかをひとつの色が教えてくれる。こだわって描いた線や色は変更したくないが、全体を進めていく内にどうしてもバランスが悪くなってくる。それは小さな決断と思い切った大きな決断の繰り返しの中で自分自身を鍛えていくことである。多様性の時代、たくさんありすぎる答えの中で自分色を見つけていくことはとても大変な作業である。アート／教育の重要性はたくさんのカオスを中で自己の内と外をうまく調整しつなぎ合わせ、居心地のいい場／時間をつくれることである。内と外をつなぎ、全体性を考え実践するインクルーシブアート学習としての絵画教育について、更なる研究を進めて行きたい。

註

1）「基礎的な絵画実技を体験し，画材等の知識を知る。事物を眼で見て観察し，手によって表現するといったメカニズムを，基礎的表現としてのデッサンや色彩使用を通して習得することにより，絵画をより深く鑑賞する能力をはぐくむ，それはまた現代社会の中におけるさまざまな仕事の美術的要素の理解にもつながる。」（跡見女子学園2021年度春学期シラバスより，https : //unipa-web.atomi.ac.jp/uprx/up/pk/pky 001/Pky 00101.xhtml）

2）『美術手帖　特集：ケアの思想とアート』2020.1、p.9.

文献

・宮島久夫，バウハウス・デザイン教育の系譜『芸術：大阪芸術大学紀要』1971, p. 45.
・茂木一司，構成教育の史的研究―イギリスの基礎デザイン運動：ビクター・パスもアとリチャード・ハミルトンの教育―，九州芸術工科大学博士課程学位論文、1998年１月.
・茂木一司，インクルーシブアート教育システム構築のための覚え書き『群馬大学教育実践研究』33号，2018，pp. 33～46.
・茂木一司，共生社会をめざす教育の中で美術教育はどうしたらいいのか？―インクルーシブアート教育という提案―『教育美術』911号，2019，pp. 14～19.